

健康文化

## 酒は百薬の長？

木内 一壽

昔から、酒は百薬の長と言われるが、これは程よくお酒を嗜んだ場合にのみ当てはまることは良く知られている。最近では外で飲む機会は減り、休みの日の夕食に食前酒を嗜む程度となり（今年の正月は能勢の「秋鹿」荒らごし生酒で過ごしました）、この言葉に近い飲み方になってきたが、若い頃はそうでもなかった。

学生するとき、私は和敬塾という寮に住んでいた。この寮は目白台から胸突坂（ダイエーの王監督が早稲田実業の生徒の頃トレーニングした場所として知られています）を下って早稲田大学まで10分弱のところのところに在り、早大の学生が3分の1ぐらい居て、当時はまだ蛮カラな風潮も残っていた。たばこは火事を起こす可能性があるのでさし控えるように言われていたが、寮の中でお酒を飲むことは禁じられてはおらず、歓迎コンパから始まり一年を通して飲む機会は多かった。寮生は地方出身者だけで、北は北海道から南は鹿児島まで各地から集まっており、帰省した際には銘々が地酒や焼酎を持ち帰り、よく寮の中で酒盛りをした。寮の北は目白通り、南には旧細川邸の永青文庫や新江戸川公園があり、東は椿山荘、西は文京区の運動場と北側を除いて夜は周りにほとんど住む人がいないので夏の暑いときなど屋上に上がりワイワイやったものである。また、目白台から南に下って神田川を渡れば、大学の周りに学生相手の飲み屋がたくさんあり、月に何度かは気の合ったもの同士行きつけの所で、話をしながら延々と飲むのが常であった。

安部球場（現在は総合学術情報センターとなってしまう寂しい限りです）脇の「かっぱ」というおでん屋は忘れられない飲み屋の一つである。というのは、ここで初めて酔いつぶれ、二日酔いを経験したためである。私が学生だった頃、東京六大学野球は明治や法政が強く、優勝の美酒には中々ありつけなかった。早稲田に入ってから五シーズン目にしてやっと優勝したが、慶応を破ったうえで決まったのだから喜びも一入であった。念願の堤灯行列は、千駄ヶ谷にある神宮球場から新宿へ出て、都の西北やコンバットマーチを歌いながら明治通りを行進した。ビルの窓から祝福を受けたり、紙吹雪が舞ったシーンを映画の一

コマのように覚えている。行列は馬場口を右に折れて馬場下町まで行き文学部にある総合体育館の前でお開きになったが、そこにはタンクローリーが来ており、直接注いでもらい飲んだビールはとても美味しかった。その後、だれともなく祝杯を上げようということになり、「かつぱ」へ行くことになった。この飲み屋はカウンターも含めて十二、三人も入れれば一杯となるようなところであったが、運良く四人座れ、まずは特級で乾杯ということになった。いま思い出してもおかしい話だが、当時はお酒の銘柄には無頓着でほとんど気に掛けておらず、何か良いことがあると特級ということになっていた。お酒はすぐに二級酒に変わりおでんを肴に、早慶戦の話をしながら飲んでいたが、程なくあたりめだけを肴に「おじさんあと二本ね」と注文し飲み続け（奇妙にお酒を頼むこの言葉だけが記憶に残っていますがあとは何を話していたか覚えていません）、気が付くと寮の自分のベットの中にいた。あとで聞いた話だが、結局、四人で四升八合開け皆酔いつぶれてしまい、寮の後輩が連れ帰ったそうである。二日酔いで頭はガンガンし、空腹でも何も食べれず低血糖で気持ちが悪くなり、半日ベッドの中で唸っていた。

度を超さなければ、学生の頃のお酒は飲むこと其のものが楽しく、議論を戦わす上での良い潤滑油だったような気がする。若い頃なら多少飲みすぎても心身ともにリフレッシュでき、その意味においては百薬とはいかないまでも、お酒はとても良い薬であると思う。少なくとも、上京するまでは引っ込み思案で人と話すことの苦手だった私にとっては、正に特効薬であった。また、椎茸とか銀杏などそれまで好きでなかった食べ物が良くお酒に合い、結果として今では全く食べ物の好き嫌いがなくなってしまった。これもお酒の効用だと思うが、呑兵衛の独り合点であろうか。

(理化学研究所バイオ・ミメティックコントロール研究センター)